

「大根の葉」前後

―壺井栄と共産主義革命文学運動―

須浪 敏子

目次

- 一 「大根の葉」が発表された時代
- 二 壺井栄と共産主義文学運動
- 三 「大根の葉」(転向時代のしんがり共産主義シンパとしての出発)
 - (一) 「大根の葉」のテーマとモチーフ
 - (二) 先取りされたノーマライゼーション
 - (三) プロレタリアの母語としての小豆島東部方言

一 「大根の葉」が発表された時代

一九三八年（昭和十三年）年九月、三九歳の壺井栄は「大根の葉」（『文芸』）で文壇デビューを果たした。一三年下半期の芥川賞候補にも上がる好評であった。「大根の葉」のストーリーは、満四歳の健が生まれつき目の見えない妹克子の手術のために自分だけを残して神戸に行った「お母さん」の帰りを待ちわびながら、「おばあさん」の家で留守をし、その間、健気に独り立ちをしていく成長の物語である。また、母親が幼い息子と協力し、盲目に生まれついた赤子の娘の眼を開きたい一心で、まだ確立されていない手術に挑み、子供の運命を開こうとする勇敢で情愛に満ちた家族愛の物語でもある。健がさみしさをこらえて瀬戸内海の郷里の村（小豆島）で留守をする一月の時間は、母親と妹が神戸で手術療養の痛みや不安と戦っている時間であり、二つの時間は別々のものでありながら情愛のテレパシーでつながり、母子の帰島とともに希望に満ちた充実した一つのものになる。戦時下でも、障害のある子供を中心に愛おしみ合う家族を描いた小さな物語である。「大根の葉」の発表の一月前、『改造』に発表された火野葦兵の「麦と兵隊」の一節、

命の惜しくない者は誰もいない。私も人一倍生命が惜しい。生命こそは最も尊きものである。然るに、この戦場に於いて、何かしら、その生命を容易に棄てさせるものがある。多くの兵隊は、家を持ち、妻を持ち、子を持ち、肉親を持ち、仕事を持っている。しかも、何かしら、この戦場に於いて、それらのことごとくを、容易に棄てさせるものがある。棄てて悔いさせないものがある

というフアナティックな英霊幻想とは、対蹠的なリアルな日常的主题を持っている小品である。

しかしながら、その頃読書界で圧倒的な人気を博していたのは、慰問袋に詰められ前線に送られて、前線と銃後のコミュニケーションを緊密にし、戦局認識の普及に努めていた雑誌『キング』などであった。「いよいよ愛国の赤心燃え立ちつゝ、率先日本精神の昂揚と総動員体制の強化とに全幅の努力を致し、一は以て前線将士の労苦を慰め、一は以て銃後の守りを固むるに微力を捧げ来った」（野間清治「社告」『キング』一九三八年九月）という講談社の『キング』が月に百二〇万部を売り上げていた。小説では、出征中「糞尿譚」で第六回芥川賞を受け、陸軍報道班員として従軍記

衆の圧倒的支持を獲得した。立憲君主制度の下での戦時という非常事態を利用して、日本社会底辺の政治参加の拡大を時流に掉さして実現していくこととなった。一九三二年以降、日本の実情に通じないコミンテルンの司令によって天皇制打倒とプロレタリア独裁を高らかに標榜した共産主義革命運動は、国家権力の外圧のみならず、転向という内部崩壊をも招き、急速に日本の労働者大衆の支持を失った。満州事変から日中戦争へと戦局が拡大していく時期に、共産主義革命運動とは、単なる経済闘争（ストライキや小作争議）ではなく、最も民主的な共和国を作るための主体奪還の政治革命であって、プロレタリアの理想国家を建設するための武装蜂起だ、ということを理解し賛同し得た労働者大衆がどれくらいいたのだろうか。中学校への進学率が二割に満たなかったと言われる戦前において、天皇制の家父長的温情主義、その見返りとしての臣民の義務を教育勅語や国定教科書などで刷り込まれていた尋常小学校卒業の一般大衆が、共産主義革命の政治的主体性と人権の奪還、経済的平等（生産手段の社会化）といった革命観を自分のものとすることは容易なことではなかったであろう。彼らの頭の中の天と地を逆さまにし、庇護し導いてくれる国家を失うことに他ならなかったからである。日本の近代化の大きな特徴のひとつは欧米に見られるような市民革命（自由権や社会権の自主獲得）を経ないことだとよく言われる。寄らば大樹の蔭式の天皇制下の社会民主主義の方に靡く方が身の丈に合った判断だったのである。こうして、国内では資本主義の改革、対外的には「新東亜の建設」を掲げ、実質的に中国への侵略戦争を容認した社会大衆党が「国民の党」になったのである。ちなみに立花隆の『日本共産党の研究 上』（一九八三年七月講談社文庫）によれば、「戦前の共産党はその最盛期でも六百名前後の組織にしかならなかったようだ」。ただ「注意すべきは、組織の小ささにもかかわらず、その影響力はかなり大きなものがあつた」。しかし、「共産党系の労働運動に支配されていた部分は、全労働者（プロレタリアート）の一パーセントにも満たなかった」、日本の「就労者全体（農民と近代的産業労働者）からみれば、〇・一パーセントぐらい」であつたという。

二 壺井栄と共産主義革命文学運動

「貧乏人をなくする主義」運動に引き込まれて

しかし、「大根の葉」でデビューした壺井栄と言えば、一九二八年から約一〇年の歳月を、治安維持法で国家権力に叩きのめされても再起し、死に物狂いの階級闘争を戦いながら、国民大衆から見放されていた共産主義革命運動の誠実なシンパであった。夫繁治や親友の窪川稲子夫妻、宮本百合子夫妻のように黨員にはならなかったが、太平洋戦争開戦直前、一九四一年一月の時点でも、党への宗教的信仰にも似たクレディビリティを検閲の眼をかくぐって表明している。戦争協力推進の雑誌「日本女性」に載った「眼鏡」に共産主義運動の革命歌として歌われた讃美歌の替え歌「花散り失せては焚木に売られ／家貧しければ人に捨てらる／誰をか頼みて、何にかたよらん／ただ主義（神）の結ぶ愛の友あり」（一九〇三年版讃美歌三三二番）を秘かにすべり込ませている。「眼鏡」は「大根の葉」以来盲目に生まれていった娘の眼を開こうと戦い続ける家族のシリーズの六作目である。分厚い眼鏡をかけて幼稚園に通うまでに視力を取り戻し成長した克子が友達にからかわれて眼鏡を川に捨てた話だが、彼女が意味も解らず聞き覚えで歌う歌として書かれている。さすがに革命歌の本命のフレーズ「ただ主義の結ぶ愛の友あり」だけは省かれている。それにしても時局を考えればやはり大胆な行爲だ。しかも、たった一語、神を主義に置き換えただけのこの革命歌はプロレタリア独裁のロシア型革命をめざしていた戦前の日本共産党の本質と世界革命のバックグラウンド（貧しい者だけがキリスト教の神に選ばれるというルサンチマンの思想）をとともよく表している。この例だけをとりても、栄の共産主義革命運動への関わりが亭主の好きな赤烏帽子式の、夫繁治に従っただけのいい加減なものではなかったことを物語っている。

明治以降急速な帝国主義化を推し進める近代日本のしんがりに控えていたような郷里小豆島の坂手村で、栄は二宮金次郎張りの尋常、高等小学校の優等生として疑いもなく、二五歳までの一〇年を郵便局や村役場で有能な女性官吏として働いてきた。ところが、上京し共産主義者の妻になって身を持って知ったのが、社会の底辺に多大な犠牲を強いて世界の列強にのし上がろうとし、それに逆らう者には容赦のない弾圧を下す天皇制国家の思いがけない顔だった。大正

大震災の二年後に上京して同郷の詩人、壺井繁治と結婚。金解禁や世界大恐慌の波に飲み込まれてく労働者たち、そして、日本の近代化のひずみを根幹から正そうと、労働者を先導してロシア革命に続くとうとするインテリ達と接することになったのだった。

栄は一九二八年、アナーキストから共産主義者に立場を変えた夫繁治の転身を喜び、「リヤク」（＝恐喝などによって資本家から金品を略奪すること）をしない正々堂々の「貧乏人をなくする主義」（『風』『文芸』一九五四年一月）だと誇りに思つて階級闘争運動に協力するようになった。栄の共産主義文学運動との関わりは、はじめは夫唱婦随的な協力であったが、一九三〇年五月二〇日のシンパ事件で夫が検挙・入獄してからは生活困窮者として自らが戦旗社事務員に雇われることになり、作家同盟の外圧内圧状況をつぶさに知るようになった。時には街頭連絡にも出かけピケもはつた。一九三一年の初め頃には日本プロレタリア文化連盟（コップ）の機関誌『働く婦人』の編集を宮本百合子や窪川稲子の下で手伝うようになり、自立した一個人の人間として運動に係らねばならないことに目覚めていった。戦旗社や『働く婦人』の編集部には、作家や詩人、女優、組織の活動家など「男なみのものを持っている」大勢の女性たちがいて、その才能を共産主義革命運動に役立てていた。作家の中本たか子、詩人の一田あき、佐藤さち子、『少年戦旗』に児童向け読み物を書いていた同県人高松出身の村山壽子、女優の原泉などに栄は大いに刺激された。そうこうするうち、一九三二年の三月のコップの大弾圧で、宮本、窪川ともども、またしても夫婦の仲を官憲に引き裂かれ、合法的大衆女性啓蒙雑誌の出版・発行にも圧力をかけてくる警察権力（一九二八年に緊急勅令によって改悪された治安維持法の濫用）と直接対峙することになった。満州事変が起こり、五・一五事件が起こり、まさに軍部独裁政権への道が確実になった時、つまり、共産主義文学運動への弾圧が最も厳しさを増した時、栄は獄につながれた夫とは独立した主体として共産主義シンパの立場を固めていった。栄の言葉で言えば「編み物と五目ずしの女」^③からの急速な脱皮が行われた。夫が「家にいなくなつてから何かが書けるようになった」（「私が世に出るまで」『新女苑』一九五四年一月）と言ひ、また、「（片岡）鉄兵さんが作同（作家同盟）へ脱退届を出し、夫人がその転向を証明した一文が『婦人公論』に出ていました。略…もし、あなたが転向して、作同へ脱退届を出すべく、私に命令しても、私は、そんな届はかきませんよ。何故か

と云うと、それは私の意志ではなく、あなたの意志なのだから、と云うわけです。」（一九三二年九月二五日付け繁治宛獄中書簡）とも言っている。どうもこの頃から、栄夫婦は繁治の言う「二心異体」（『中日新聞』一九六六年一月二〇日）を基本とした夫婦愛、同志愛に結ばれるようになったらしい。

そして、栄のプロレタリア文学運動との関わり合いは、宮本（中條）百合子などより古く長い。三・一五事件（一九二八年）、四・一六事件（一九二九年）、五・二〇のシンパ事件（一九三〇年）、一九三二年三月二四日の日本プロレタリア文化連盟への大弾圧と、共産主義文学運動の盛衰を全時代にわたって夫の逮捕、拘留、投獄という形で直に体験し、政治主体として、また、女性作家としての主体に目覚め、「二心異体」の共産主義シンパとなったようである。愛する夫を奪われた妻（犠牲者家族）として母として、また、それゆえに生活の困窮が増したプロレタリアートの一人として、国家権力に直接抵抗していく作家を誕生させていったようだ。

文学運動が全日本無産者芸術連盟（通称ナツプ）の時代から日本プロレタリア文化連盟（通称コップ）へと拡大衰退して行き、大衆の啓蒙雑誌でナツプの機関誌『戦旗』がコップの『プロレタリア文化』『大衆の友』『働く婦人』へと移っていった時期、機関誌の発行・経営責任者であり続けた夫を栄は助け、編集・発行・配布に係って、作家や編集者たち、作家同盟の人たちとの繋がりを深めていった。また、雑誌の金策にも駆けずり回り、売れっ子作家の資金提供者に頭を下続けた。運動の上げ潮の時には、繁治が隔月一冊の割合の発禁弾圧を跳ね返し、『戦旗』の発行部数を創刊号の七千から二万二千部（一九三〇年五月号）まで押し上げた。また、「日本プロレタリア作家叢書」として出版した小林多喜二の『蟹工船』や徳永直の『太陽のない街』はそれぞれ初版一萬部を印刷した。「二心異体」の固い絆に発展していく栄の内助の功が奏して、そんな黄金時代が築かれたこともあったのだ。とは言っても、『キング』や火野葦兵の兵隊ものの発行部数とは二桁違っているが。

アカい絆に結ばれた夫婦、そして難民家族のモップル（国際赤色救援会）

栄は詩作も止めてアジ・プロ文学運動の裏方に専念する夫に協力するうち、治安維持法違反で投獄され拷問・虐殺さ

れる多くの同志家族とも親密な関係を持つようになった。作家同盟を中心とした犠牲者救援係（モツプル）として活発な実践運動を行うようになった。自身、繁治を通算三年も刑務所に取られ、不如意な生活を強いられるうち、夫婦（家族）と同志家族だけが最後の生きる砦だと知った。妻子や同志からの手紙と差し入れだけが生きる糧の獄中の夫はそれらを心待ちに待ち、妻は「夫を奪われ、経済的能力を奪われ、健康を奪われ（＝脊髄カリエスのぶり返しと視力の喪失）、そして、此間から、子供さえも奪われようとした」「大きい生活苦」（一九三三年九月一日付け繁治宛獄中書簡）の中で夫の求愛に答え、主義への不屈な志を共有しようとした。そして、同じ苦しさで貧しさを抱える同志家族の団結と相互扶助がプロレタリア解放運動の実践であり、難民としての政治主体確立の闘争であることを知っていく。三二年テーゼ以後の、「転向」の上申書を書かねば、未決時の保釈願いも既決時の刑の執行猶予も認められなくなった厳しい時期に、「あなたの栄は、一步もゆずる事なくあなたの道を真つ直ぐに歩いている。こんなに離れていても、あなたと共にある確信をもっています」（一九三二年八月二四日付け繁治宛獄中書簡）と書き送っている。また、窪川稲子や宮本百合子、中野重治夫妻、井汲卓一夫妻、中野鈴子、今野大力夫妻、などと家族同然に生活を支え合うようになっていった。

栄は『マルクス主義』とか『インターナショナル』とか『資本論』とか『私の読書遍歴』『新潮』一九三二年一月）と言う。しかし、プロレタリアートの祖国はソヴィエトであり、中国にも毛沢東率いる優秀な同志が大勢いることを夫や仲間から聞いて知っていた。「『プロレタリアートの祖国ソヴィエト同盟を守れ！』というスローガンの下に、青春の大半をソヴィエトの政権の強大な発展に賭けてきた」と言い、一九三六年の二・二六事件のクーデターを「これが若し我々の起こした革命だったら……」と虚しがる夫壺井繁治の自伝『激流の魚』（一九六六年一月）を読めば、彼が戦前のオーソドックスな共産黨員であり、栄が夫から学んでいたことの大概がわかる。そして、二〇一六年に出版された『二人の手紙―壺井繁治・壺井栄 獄中往復書簡集―』（編集室屋上）は、刑務所の壁を隔てて夫と妻が互いの愛と絆を赤裸々に求め呼び合った記録であり、作家同盟同志家族の差し入れや手紙が、どんなに囚人の志を強め孤独を慰めたかも如実にしめしている。宮本百合子夫妻の『十二年の手紙』に優るとも劣らない同道二人の互いを気遣い合う書簡文学である。繁治は黨員としても男としても威張らず、妻に對等に「あなた」と呼びかけ、細やかにマ

ルクス主義文学の手ほどきを行い、生活手段の相談に乗っている。林姓の娘にも平仮名書きのお父さんからの手紙を忘れない心遣いだ。栄は同志に見せる「元気で明るくて、仕事に燃えている」顔とは全く裏腹な、ストレス過多のやり場のない激しい憤懣をストリートに夫にぶつけている。手紙の文字量がお互いの愛情を計る計りだと、長い手紙を要求しあってはケンカ腰になるユーモラスさや、シャバでは食べたことのないうまい差し入れに女房の有難みを感じたりする夫婦善哉風な味わいもあつてなかなか面白い。運動が衰退し息の根が止められかけた状況下で互いを生きる支えとして求めあつた栄夫婦、その一体感とユーモアが読む者の涙と笑いを誘わずにはおかない。豊多摩刑務所での夫との面会、「いわば、そのひと月に一度の会う瀬のために、そこへ生きがいの中心を置いているような」（『空』『改造』一九五四年二月）生活の中から栄の文学は誕生したと言つていいだろう。

そういつた彼女に、天皇主権の帝国主義国家日本は祖国やふるさとどころではなかった！ 家族を奪つた、断固戦うべき敵対権力であつたし、国民大衆を天皇制忠誠へのわずかな恩賞で騙し、徴兵で生命までも略奪する非人道的な権力集団と受け止めていただろう。いわば国家権力に迫害されることで国家というものの負の側面を身に染みて知つた栄にとって、祖国などあろうはずはなく、信頼できるのは、揺るがないアカの犠牲者家族の相互扶助的結束、難民家族の固い結びつきだけであつた。

戦後に描かれた佐多稲子の「歯車」（『アカハタ』一九五八年一〇月〜一九五九年四月）にも一九三二年当時、人前で話すのが何よりも苦手だつた栄が思想犯被告家族代表として裁判所の首席判事と予審促進、統一審理要求、通信の制限の緩和に対する交渉を行ったこと、朝鮮人詩人の金龍済の家族代わりとしての面会許可を勝ち取つたこと、また、獄中の同志に小林多喜二の虐殺を小林の母親名義で花を差し入れることで知らせたことなどが描かれている。そして、反撃文「だからこそ」を掲載した『女人芸術』の集まりで（長谷川時雨慰労全快祝賀会 目黒雅叙園、一九三二年年末）、一二〇人もの女性作家を前にして、稲子の夫窪川鶴次郎が作詞して当時よく流行つた革命歌「里子にやられたおけい」を歌つて自分の立場を披露した。「おけいはみつた／小さいながらもプロレタリアだ／あんちゃんも牢屋／みんなに別れて／里子にやられ／剣と帽子の絵をみれば／じいちゃんばかと／呼んだっけ」と子供目線のプロレタリア解放と戦

争反対を訴えた（一九三三年一月七日付け栄宛獄中書簡）。

三十代半ばのモップルのおばさん、アジプロ作家に

壺井栄のプロレタリア革命運動へのシンパシーが生半可なものでなかったことの証明は、軍国主義化する国家権力の
大弾圧とコミンテルンの三二年テーゼへの懷疑から運動が急速に衰退・壊滅していく中で、彼女が自分の考えでアジプ
ロ的雑文や小説を日本プロレタリア文化連盟の雑誌『働く婦人』や『文学新聞』などに書き始めたことである。一九三
二・三三年にかけて、満州国の建国宣言、五・一五事件、国際連盟の脱退と急速な軍国主義化が進む一貫として日本プ
ロレタリア文化連盟（コップ）の大量検挙、日本労働組合全国協議会中央幹部の一斉検挙、共産党中央委員岩田義道、
小林多喜二の虐殺があり、党内部からも前共産党中央委員の佐野学、鍋山貞親の獄中での転向声明があつて、組織崩壊
がなだれを打って押し寄せ、作家同盟の中でも揉めた時期に、栄は反撃の筆を執り始めたのである。自らの最初の検挙、
拘留生活を超リアルに、人物を実名で登場させた「一九三二年の春」「刻々」のノンフィクション小説（いわば、宮本
百合子版『一九二八年三月十五日』）を書いて、「例えばわたしひとりについてみてさえも、この暴圧はプロレタリア婦
人作家としての新たな決意を与えるにすぎない」と言つた宮本百合子や、困難な状況下でプロレタリア婦人啓蒙雑誌
『働く婦人』を出し続ける窪川稲子と同様な決意を栄も持っていたのである。作家同盟は林房雄などの先導で一九三四
年の二月に解散するが、栄は一九三二年の七月前半に作家同盟に入り、一〇月一八日には警察の非道と狡猾を告発する
小説「屍を越えて」を脱稿して、今野大力や窪川稲子に指導を乞うている（一九三二年一〇月三十一日付け繁治宛獄中書
簡）。一九三四年五月にプロレタリア文学運動の敗走的雰囲気を押されて転向の上申書を書いて保釈された夫繁治が、
その時の栄の態度を後に「無言でわたしの屈服に反対していることが明らかのように思われた」（『激流の魚』）と回想
しているのも、「熱心に努力しさえすれば、あなたは必ず一人前の作家になれる素質を持っています」（一九三二年六月
二三日付け栄宛獄中書簡）と励ました女房が、敗北した夫を尻目に、主義を曲げない作家として立ち上がったことへの
後ろめたい衝撃が忘れられなかったためであろう。

「里子にやられたおけい」ではないが、栄の姉ミツコも裕福な伯父の家へ養子に出されている。栄も物心がついた頃から借金した他家の子守に雇われるプロレタリアであつた。家は貧乏で、母親に「村の人に対して大きい顔をしちゃあならんぞ、いつもいましめられ」る自己卑下的借金生活の中で育ち、授業料のいらない師範学校へも行けなかつた。それでも「馬鹿の一つ覚えのように、身を粉にしても働くことを人間生活の最も立派な道として教えられ」（渋谷道玄坂）『東北文学』一九四七年五月）、重い脊髄カリエスを押して村の郵便局や役場で働き、「貧乏にたたき上げられた負けず嫌ひ^⑥」の自立的信条をかたち作つた。しかし、彼女の自立志向は、似た境遇の者へのいたわりを忘れるものではなかつた。郵便局や村役場の女事務員となつてからは、読み書きも出来ない、「身売つても親元に送金しなければならぬ」「渡りものの酌婦」たちに「いつわりの恋文」を書いてやり、為替を組んでやつた。諸般の「届も大目に見てやつた」（『野育ちの青春』『婦人公論』一九五五年一月）。しかし、それ以前に、人が仲良く暮らす何よりも秘訣は、食うための自助努力を前提とした相互扶助的交わりだと実家の暮らしぶりから教えられていた。腕一本で世間を渡る樽職人の技能を伝授する代わりに弟子たちから労働力の供給を受ける栄の実家、しがない樽屋の親方一家の血族と徒弟を区別しない平等な家風に栄は大きな影響を受けていた。弟子と同じ釜の飯を食い、同じ場所と同じ労働に従事する温情的徒弟制の家風が栄の人間観の基礎を作つていた。だから、彼女にとってリヤク（略奪）を肯定するアナーキストやルンペン・プロレタリアはまっとうなプロレタリアではなかつた。彼女の一九三五年の小説「月給日」には、プロレタリアの子供に首を傾げさせるかっぱらいプロレタリアが描かれている。貧乏人の子だくさんの樽職人の親方家族の一員としての、他人の弟子たちとの打ち解けた共働き体験、そんな大家族体験が共産主義革命運動に参加する素地を作つていたと思われる。夫が獄中にいる留守宅を何人の同志たちに開放し、今野大力など弾圧に倒れた者をどんなに親身に看病したことだろう。栄にとつて夫婦の愛情を核とした同志家族の連帯とは、故国から迫害された非国民難民の孤立した結束であつただろう。そして、その助け合いは漂流非国民家族の相互扶助であり、肩を寄せ合つて暮らすソヴィエト的なものであつただろう。

栄の日中戦争観

そんな壺井栄が、社会大衆党になびき日中戦争に賛同して戦地に送られる大多数の国民をどんな目で見ていただろうか。「大根の葉」の直後に書かれながら「大根の葉」に先立って発表された小説「海の音」（『自由』一九三八年二月）は、寒村坂手村、（『大根の葉』の舞台と同じ栄の故郷）の最下層の流れ者二世の男にとつての日中戦争の徴用とは何だったのか、を書いている。『内海町史』によれば、「海の音」は一九三七年八月二二日、第二次上海事件を戦うために多度津港から上海に向けて丸亀十二連隊隊員として出発した出征兵士の物語である。栄の日中戦争反対と国政への不信とは、出征で家族と引き裂かれる主人公与平の怒りと悲しみの胸の内と重ねられている。主人公与平は金、だけが頼りの貧しい流れ者の父に虐待されて育ち、義務教育の小学校へもやってももらえず、村人からも乞食同然に扱われながら、渡海船の親方に拾われて妻子が持てる境遇にまでたどりついた。そんな卑屈で孤独な環境に耐えて来たため、与平にとつて家族は何物にも替えがたい宝であった。しかし、一九三七年の盆の時期に与平は最も年かきの兵士として動員されることになる。職業も身分も年齢もさまざまな者が「皆一様に出征兵士として首途を祝われ」、村人から「思いがけない」温かい言葉を掛けられ饞別の金一封までもらった。「与平さん、心配せんと行つておいでなされよ。我身のためじゃない、みなお国のためじゃ、後に心は残ろうけんど、なあそれ、歌（『軍歌「戦友」」）にもあるじゃないか残しちゃならんこのからだいうて」と、彼は生まれて初めて村人たちに持ち上げられ、「まるで首根っこをつまみ上げられた仔猫のような」居心地の悪い気持ちになった。「応召兵」になることで手のひらを返してへつらつてくる村人を尻目に、残していく家族のために「アイスクリン」を作つて喜ばせ、汗みどろになつて薪を割り続ける。「ちき生ッ！ ちゃんころ奴、女房子供と、こんちき生！ 生き別れ、さしくさる！ くそッ」と、「一途に敵は割られている薪であるかのように」斧を叩きつけ、家族が毎日使う燃料を少しでも多く蓄えておいてやろうとするのだ。彼は村や天皇制国家の恩恵に浴したことはほとんどないにもかかわらず血税を支払われる、家族だけが頼りの孤独なプロレタリアなのである。赤紙が来たことはいっぱしの村民にも日本帝国国民にも取り立てられた風だが、愛する妻子に生きて再び会うことはできないかもしれない。村人は賑やかに首途を祝つてくれ「心配せんと行つておいでなされよ」と敬い言葉で言つてくれたが、

誰が何処まで妻子の生活の面倒をみてくれるのか？ 村役場は自分と同類の平仮名も読みかねる女房に代わって軍人扶助法の適用申請をしてくれるだろうか？ 村の愛国婦人会や軍人後援会が少しは助けてくれるのだろうか？ いややはり、尋常小学校六年が頭の三人の息子と甲斐性なしの目の悪い妻がなるようにしかならぬ暮らしに落ちていくのではないかと与平は残していく家族の生活が何よりも心懸かりで、自分の恨むべき本当の敵が誰なのかを考える余裕もない。残される家族の生活を精一杯気遣う無知なプロレタリアなのである。しかし、作家栄は与平のその無知を咎めるどころか、同情の念を持って描く。共産主義革命運動を戦った自分たち夫婦も国家権力によって長く生き別れにされたからだ。栄は売れっ子作家なつてからも、難民と変わらぬ社会の最底辺のさまざまな人々を描き続ける。栄にとつて、彼らは国家の恩恵にあずかる事が最も少ないか、逆に虐待され、にもかかわらず、命までも喜んで差し出すように仕向けられ騙された、同情すべき仲間であつたからである。

そして、この反戦小説「海の音」には、栄の共産主義革命運動体験と深く係るシンボリックな記念碑が検閲の眼をかくぐくつてこともなげに描かれている。それは、盆に村人たちがこぞつて参る坂手向ヶ丘の村の共同墓地（そこには与平の親父の墓もあるのだが）、そこに「去年」建てられたばかりの「海で死んだある詩人の碑」（一九三六年五月建立）である。つまり、一九三〇年五月一九日の夜に別府航路の重丸から播磨灘に投身自殺をし、二〇日後に坂手沖で溺死体が発見された詩人生田春月の絶筆の詩碑「甲板にかかつてゐる海図」の碑である。海に飛び込む直前にメモった詩の碑である。

栄の転機、「シンパ事件」と生田春月の投身自殺

甲板にかゝつてゐる海図―それはこの内海の海図だ―ちつとそれを見てみると、一つの新しい未知の世界が見えてくる。

普通の地図では、海が空白だが、これでは陸地の方が空白だ。たゞわづかに高山の頂きが記されてゐる位なものであるが、これに反して海の方は水深やその他の記号などで彩られてゐる。

これが今の自分の心持をそっくり現してゐるやうな気がする。今迄の世界が空白となつて、自分の飛び込む未知の世界が彩られるのだ。

この詩がメモられたとは同じ時に、栄の人生を大きく変えることになった文化団体への初めて大弾圧、シンパ事件が起きていたのだ。

この詩碑の銅版リレーフは高村豊周（人間国宝）、石川三四郎揮毫、裏面略歴は加藤武雄である。地元坂手村村長木下長松、香川県出身の詩人河西新太郎（小豆島観光で一九五七〜七〇年代によく歌われた「オリーブの歌」の作詞者。作曲者は服部良一で、その詩碑は小豆島の土庄港、平和の群像の側にある）が建立に奔走し、建立除幕式には社会主義者石川三四郎、口語自由詩の確立者萩原朔太郎、作家で春月の友人加藤武雄、春月の妻生田花世の友人で石川三四郎の養女でもある望月百合子が出席した。春月は今でこそ文学史から忘れ去られた存在であるが、当時は詩碑の建立・除幕式に係った豪華メンバーからも推測されるように大正文壇（詩壇）の寵児であった。ハインリッヒ・ハインやヘルダールの名訳詩者として、若者の心を虜にした『靈魂の秋』や『感傷の春』の感傷詩人として、社会主義、アナーキズムへの傾倒者として、新潮社をバックに文芸ジャーナリズムに名を轟かせた超有名人であった。遺体が漂着し詩碑が建立された栄の故郷坂手村にとっては、願っても無い観光資源として「春月さん、よくぞ死んで下すった、よくぞわが村に流れて下すった」という恩恵的側面が多分にあったようである。しかし、栄にとっては、春月が自殺したその日時は、作家同盟や戦旗社への大弾圧があった最初の時であり、夫の壺井繁治も含めて、多くの著名作家が共産党への資金提供の罪（治安維持法違反）で刑務所へ収監された、忘れられない記念の日（「シンパ事件」また「五月二〇日事件」と呼ばれる）であった。思想の自由、表現の自由への弾圧が年ごとに厳しさを増し、文学者は国家権力の傀儡となる以外は窒息せざるを得ない状況に追い詰められたことを象徴する日であった。戦後の「まずはめでたや」（『文芸春秋』一九五五年一月）で、栄は「春月碑の前にはじめて立ったとき、…略…私は海に身を投げた詩人の心にぞっとした。私は高い塀の中にいる詩人たちのこと思った」と書いている。また、「二十四の瞳」の小豆島ロケ中、一九五四年三月二六日に栄は、『婦人公論』愛読者高松市支部の薄井弥代子氏に

春月さんは昭和五年の五月一九日の夜、別府行きの船から播磨灘で投身したそうです。その頃は治安維持法で数多くの文学者が、発禁処分を受けたり投獄されたのです。詩は反逆の精神から生まれると主張していた春月さんは、屏息して生きられなかったのでしょうか

〔文学講座〕二〇〇七年一月菊池寛記念館

と話している。春月はさまざまな顔を持ち広範囲のジャンルに跨る大正教養派の典型であったが、栄は『虚無思想の研究』、「ロオザ・ルクセンブルグ」や「象徴の烏賊」を書いた社会主義者、またアナキストとして彼を捉え、親近感を抱いていたようである。親近感どころか、――戦前、戦後を通じて、果たして栄や繁治がその事実を知っていたかどうか確認できないが――、生田春月はその死の直前に警察の全国検挙を逃れて逃避行する共産党の中央委員のトップとナンバー・ツ―を自宅にかくまったシンパであった。作家同盟の中本たか子の仲介で佐野博を、片岡鉄平の仲介で田中清玄を、時を違えて匿っていたのだ！春月は田中に二階の一室を与え、素知らぬ顔をしていたが、ある時、「君のように、生命がけで取っ組みせるものをもっていること、私には羨ましくてならない」としみじみ言ったという（立花隆『日本共産党の研究 上』）。それから間もなくして、彼は「海図」の世界に旅立ったのである。

一九三〇年の前半と言えば、日本は金解禁と世界恐慌の波及でみるみる不況が深刻化し、都会は失業者であふれ労働争議の頻発に当局が手を焼いていた。その暴動化する危機的エネルギーを共産主義革命に転化・展開させていくことができれば、戦前の共産党にとっては千載一遇のチャンスであった。多くのインテリは日本における共産主義革命の実現をマルクスの理論によって先取りし、資本主義社会の崩壊を当然のことと予見していた。それゆえ、小林多喜二や宮本顕治、蔵原惟人をリーダーとする政治に目覚めた文学者たちも、政治の優位性理論にもとづく文学運動で共産主義革命をバックアップしようと命を賭けて戦ったのである（理論と実際はまったく別物であったが……）。時はプロレタリア文化の全盛の時代であり、プロレタリア文学が既成の文壇文学を圧倒し、映画も演劇も左傾の花盛りであった。先に述べたように『戦旗』の発行部数が最高になったのも、一九三〇年の五月である。しかし、共産主義革命運動の上げ潮の流れを一気に変えたのが、この「シンパ事件」であった。国家権力は、思想、言論弾圧に加え、共産党の流行を煽るシンパ（その中心はインテリと学生）に「利益供与」の罪を問うことで、党を経済封鎖に追い込むとともに人心を共産党

から引き離す手段に出たのであった。

当局のこの作戦の効果は即効的かつ持続性を持っていた。栄自身、金銭面での窮状を一九三〇年一月一日付け繁治宛書簡で「差し入れの事を考えると、いつも私は眼の中が熱くなるのです。この間作家同盟の人に会って聞いたら、貴方が、一番少ないのです。だけど、とにかく私は先月給料を二十円位しか貰わなかったのです」と訴えている。にもかかわらず、「シンパ事件」後、栄の運動への関わりは傍目も驚くほど積極的になつていった。詩人の加藤喜久代は獄中の繁治に

今度、あなたが出て来られたら、あなたはそこに、今までの、明るい、皆の羨しがる「壺井のワイフ」以外に、実にいい同志を見るだろう。私たちの眼にも、羨ましいほどマダムは元気で明るくて、仕事に燃えている。

(一九三一年二月二五日付け栄宛獄中書簡)

と書き送っている。「シンパ事件」で当局がねらったのは、知識人シンパからの莫大なカンパ資金網を一網打尽にすることによって共産党の全盛時代を叩き潰そうとすることであった。党関係者や知識人シンパにとって、また、戦旗社勤めの栄にとっても、時代の潮目が変わり、兵糧攻めの孤立がせまられる分水嶺となつた忌むべき記念日にほかならなかった。この時期の共産党、いわゆる武装共産党はコミンテルンとの連絡網が断たれていて、コミンテルンから運動資金を得ることができなかったが、栄はその時、屈するどころか、弾圧を跳ね返す覚悟を固めたのである。そういう意味で春月の「海図」の詩碑は、栄自身が主体的に共産主義革命運動にシンパとして関わりうとした人生の転機を示す記念碑でもあったのである。栄は、投身自殺をした春月とは逆に絶望に打ち勝つ社会変革の道を選択した。そして、春月の記念碑は、ふる里からアカとして拒まれた栄の悲しみと怒りを描いた「まずはめでたや」のみならず、繁治と結婚する以前、後に舞台装置家として名を成した青年画家大塚克三との失恋を告白した「昔の唄」(『婦人公論』一九四二年一月)など、彼女の人生の転機となった事件を小説化する際、必ず傍らに寄り添うことになる。

三 「大根の葉」（転向時代のしんがり共産主義シンパとしての出発）

さて、壺井栄の名前を文壇に知らしめることになった「大根の葉」に話をもどそう。（１）、詳しく「大根の葉」の題材と主題の背景を探り、栄の共産主義革命運動、特にモツプル（犠牲者救援）活動との関係を探ってみよう。その上で、（２）、重度の視覚障害を持つて生まれた女児ゆえに、その子の社会的一人立ちに母子家族が協力し気遣い合う家族愛のテーマが意図するところを探っていこう。共産主義文学運動の中で学んだ生活権や政治主体意識が、栄の場合、「働かざる者食うべからず」の階級闘争を基本としながらも、教育や社会福祉的な方向、特に障害者の自立支援を求めて発展していくことを「大根の葉」とそのシリーズ「風車」（『文芸』一九三九年三月）「赤いステッキ」（『中央公論』一九四〇年二月）「窓」（『改造』一九四〇年八月）「霧の街」（『知性』一九四一年九月）「眼鏡」（『日本女性』一九四一年一月）とその周辺の作品の中に探っていこう。さらに、（３）、「海の音」以来、栄の故郷小豆島が作品の舞台に設定されたのはなぜか。その日本の近代化のしんがりをいく瀬戸の小島の寒村の風物描写や方言が優れた文学的効果を持ち、なぜ、多くの読者の望郷的な思いを掻き立てたかについて考えてみたい。

まずは、（１）について、一幕三場のドラマ仕立て風のプロットから詳しく追っていこう。一場では、東京住まいの大学出の夫に仕事が無く、家族が一緒に生活できないで、若い妻が夫婦の郷里、小豆島で編み物内職をしながら子ども二人を育てている。そのしんどさの中、ショッキングな不幸に見舞われる。満一歳になったばかりの娘が強度の弱視、当時は不治の病とされた先天性の白内障と医者に告げられたのだ。若い母親は不憫さのあまり、貧乏な境遇も忘れ姑の反対も押し切って、娘の眼の治療に最善を尽くそうと行動する。幼い息子に見えないことの不便を目隠しをして納得させ、彼を島に残し、名医の手術を受けるために克子を負ぶって神戸に出立する。そして二場では、満四歳の健は妹の眼が見えるようになり、お母さんと帰ってくるのを心待ちにしながら、父方のおばあさんの家（伯父が家督を継いでいる家）で一か月余りを健気に辛抱する。母親と離れるのは初めてで、父親の実家といっても健にとっては馴れない隣村の

伯父一家にあずけられての暮らしである。よく似た年齢の従兄妹の太郎や秀子もいる。村の大人からは「あっちの孫さ
んかいな、お父さんによる似とらいや」とめずらしがられ、鬼ごつこの遊び仲間からは足の遅い「ぐずま」、大根の葉
が辛くて泣いてばかり、と囃され、従兄妹の太郎からは「おどれや、もう健婦にくされ。健はうちの子とちがうがい」
とせらわれる。それでも健は村言葉を覚えて村落共同体の子供集団や大人の労働生活に分け入っていく。「お母さあん、
早よ戻りい」と段々畑の上から見える船に呼びかけ、父母の手紙を届けてくれる郵便屋さんを心待ちにしているのが、
健の本心なのだが、おばあさん一家や村人たちの相互扶助性といったわりに支えられて、彼は自然と一体化した農村生活
のおもしろさや健やかさを体験していく。ひと月余りの後の三場では、お母さんが健を迎えに来ると、安堵の喜びで泣
きそうになるのを歯を食いしばって耐える。しかし、妹の手術の結果は片目の視力はわずかに回復したが、もう片方は
失敗したというものであった。借金しても再手術させたいと母親は懇願し、「たとえ見えるようにならないでも、する
だけのことはしてやらんとあきらめがつかいで：わたしは死に身になつてはたります」と姑と義兄をかき口説く。
「錢の入れ損」じゃないかと封建的で儉約な村の考えで押し返されるが、家産の弟の分け前分は何に使おうとかまわな
いだろうと、義兄は精一杯の協力の姿勢をみせる。「お母さん」は希望を捨てない。「人生に安易に絶望するよりはそこ
にいつも可能性を見出して行きたちの人間」⁸なのである。健を背中に負ぶつての帰り道、わずかに視力の出た娘の一举
一動の変化がどんなにお母さんを励まし喜ばせたかを心置きなく息子に語る。健も妹の変化に希望と安堵を持つてうな
ずく。

「大根の葉」の誕生、また、作家壺井栄の誕生には、志を共にした女性プロレタリア作家の友情のエピソードが伝わっ
ている。小説の題材は壺井栄の末の妹一家に実際に起こった出来事だが、妹が手紙で細やかに伝えてくる母子の話を窪
川稲子に話すと、「あなたは童話の書ける人だと思わ。書きなさいよ」「その話をそのまま書きなさいよ」とけしかけ
て坪田譲治の『風の中の子供』（一九三六年二月竹村書房）を貸してくれた。それがきっかけで小説が書き始められ、
「八枚書いちゃ持つてきて二人で読んで、十五枚書いちゃ持つてきて」⁹直してというような親切的指導を受けて、八回
も書き直して出来上がった。一九三七年上旬のことであったと言う。その間、幸運にも「大根の葉」のモデル母子が貧

乏覚悟で家族一緒に暮らしたいと上京し、一九三六年九月から翌年五月まで上落合の栄の家の近所に住んだ^⑩。神戸の医者に手術を受けた後の克子のモデルの様子や、田舎言葉と東京言葉をチャンボンに話し、環境の変化を吸収してタフに知恵づいていく健のモデルの成長ぶりを栄夫婦は遺憾なく観察できた。繰り返し読んだ『風の中の子供』に照らし合わせて、「私は初めて、自分の中に坪田氏とは大変異なっているが、風の中の子供が大勢住んでいることに気持ち搔きたてられた」（『野育ち』『月刊文章』一九四〇年三月）と、目から鱗の小説の題材の発見を打ち明けている。そして、小説の主人公を子供（健）にしたテーマ設定や構成（プロットの展開）も『風の中の子供』からの影響が大きい。家族に降りかかった災難がきっかけで、社会的自立への冒険の一步を踏み出す小さいヒーローの物語の骨格は、父親の私文書偽造事件のために家族と別れて山奥の叔父さんの家にあずけられ、そこで大人も手を焼く自由奔放な冒険をやって家に連れ戻される三平の物語と非常によく似ている。一人立ちの冒険を経て母親（家族）と再会を果たす結末も似ている。「健のおかあさんは」「おばあさんは」という小さなヒーローの目線に合わせたナレーションの方法も『風の中の子供』から学んだものだろう。言わば、向目的な子どもの心がよくわかるストーリー・テラーとしての栄の才能を発見したのは窪川稲子であったが、題材の扱い方やテーマ、プロット展開などのヒントを具体的に教えてくれたのは、坪田譲治の『風の中の子供』だったと言えよう。原稿が一応出来上がり、発表先を探している一九三八年になっても念には念を入れて原稿に手を加えている。一九三八年三月一日の日記には「終日『大根の葉』にかじりつく」とある。題名は宮本百合子が付けてくれ、発表先も「大根の葉は干し菜になってしまふ」と気をもんで探してくれた。『文芸春秋』『人民文庫』と回されたあげく、改造社の『文芸』九月号に載った。そういういきさつで「大根の葉」が世に出た。

とは言っても、窪川や宮本（中條）から栄が童話を書くよう勧められたのは、四年も前からのことであった。

いね子さんや中条さんたちは私に童話をかく事を非常にすすめてくれるのです。…略…私のかくものの中には童話的なものがあるし、…略…とにかく、今すぐれた童話作家のない時、大いにかいたくしてほしい、と云うのです。

…略…そう云われて童話に注意して見ると、村山壽子さんの童話^⑪などは、私としてはどうもうなずけないし、非常に物足りなさを感じます。だから、一つ書いて見ようと思っていますが、やっぱり六ヶしい

(一九三三年三月八日付け繁治宛獄中書簡)

そう言いながらも、親の背中を見て育つ東京の貧しい階層の子供たちの日常を「長屋スケッチ」(『進歩』一九三五年三月)「給料日」(『婦人文芸』一九三五年四月)などの小説に書き、繁治や百合子とコネのある小雑誌に発表していたのである。「給料日」は夫が獄中にある極貧のさなか、夫婦の実子同然に育てていた林姓の姪と栄が実際に遭遇したスリ被害に取材した作品である。そういう手探りの中、子供は大人社会を映す鏡であり、またそれを乗り越えて歴史を紡ぐ希望だと考えるようになった栄が、『風の中の子供』に出会ったのは、まったく肝胆相照らすの幸運であった。「子どもの世界とおとなの世界がみごとに交流融合する」(水藤春雄『善太・三平物語』解説 一九七七年三月 偕成社)、父親の冤罪事件を小学生の息子たちの眼で見て描いた『風の中の子供』は、まだ自分の文学的特性を掴みかねていた栄の背中を強く押し、進むべき方向を示唆したのであった。坪田はアナキストの児童文学者小川未明に私淑し、マルキストになる以前の壺井繁治等と黒島伝治の処女作「電報」を世に出した雑誌『潮流』を出していて、袖振り合うの縁以上の縁があったのである。栄の次の言葉は、「大根の葉」でようやく自分の文学的モチーフが奔放に働き出した感動と確信を遺憾なく伝えているだろう。

私としてはたった一冊の著書の題に選んだというほど「暦」が私の作品の中で一ばんよいものとは思っていない。それほど自信のもてるものはまだないのだけれども、好きな作品としては「暦」よりも「大根の葉」の方がもっと好きである。あのモデルは、わりと私の身近にあるので、私の関心も深いわけである。いい加減で方向を変えたらという好意ある忠言も聞くけれど、私は自分の筆の続く限り、「大根の葉」の子供とは手をつないで行くつもりである。作品への愛情と同時に、そのモデルへの愛情で、私はあれを書くときにはお化粧をしなければならないほど泣いたり笑ったりする。

(『暦』その他についての雑談)『三田文学』一九四〇年一〇月

ところで、「大根の葉」は妹の手術のために満四歳の健が「お母さん」と協力する話だが、成功するかどうかわからない上に高額な医療費のいる手術に東京の「お父さん」はどう関ったのだろうか。大学を出ても一家を養える仕事に就けず、東京から手紙や正月用の健の靴を送ってくるという情報以外、「お父さん」はこの小説に登場しない。重い視覚

障害を持った我が子の手術という一大事に「お父さん」はなぜ顔を出さないのだから。小説のモデル一家の「お父さん」は東京で何をしていて、実際どのような人だったのだろうか。

『二人の手紙』や繁治の『激流の魚』などによると、「お父さん」のモデルは壺井繁治の甥で小豆島堀越村の旧家、戎居仁一の長男戎居仁平治である。栄の末妹の岩井貞枝とは早稲田大学在学中自由恋愛で結ばれ、一九三三年九月長男研造をもうけた。同年プロレタリア学生運動責任者として逮捕され、留年する。また、前年、島の醤油会社の重役であった父を失い戸主となるが、家産が尽きていることを知った。一九三四年三月に大学は卒業するが、全国的不景気の最中、警察にマークされて思うような就職ができないまま、東京に留まる。一九三五年三月、妻が小豆島で長女発代を出産するが、共產主義革命運動の壊滅や実家の没落のショックなどから妻以外の女性との関係に慰めを求め、小豆島の家族を思いやる事が少なかった。実際、仁平治が新潟高田の中学校の英語教師として妻子と安定的に同居できるようになったのは、一九四〇年三月になってからである。妻貞枝の側から言えば、発代が誕生して先天性白内障とわかると夫への気遣いなど忘れ、その前後は

私も私のぐるりの者も角の生えたような神経を持っていました。第一に耕治（仁平治）の仕事が見つからないというところから起こるいざこざが複雑な波紋を描いて、父子別々の暮しをしていました（「窓」）
まるでおめかけさんのように父親のいない子供を育てて田舎に引っこんでいた

（「遠い空」新聞『民報』連載一九四七年四月～七月）

という辛い状況だった。ところが、思いがけないことに、仁平治の母が貞枝母子への態度を変化させた。初めは貞枝と仁平治の結婚に身分違いも甚だしいと猛反対していたのが、家運の再興を託していた長男に失望して気弱になると、逆に貞枝に近づき、孫の発代の眼病が戎居の血筋の遺伝とわかって、いっそう母子をいたわるように変わっていったと栄は言う。貞枝母子が小豆島に長く留まれたのはこのような和解があつたからである。そして、長男仁平治をあてにできない戎居の姑は娘に婿鬼士男を娶せて一緒に暮らした。小説中の健がひと月世話になったのはこの鬼士男の家庭である。普段、貞枝母子は栄や貞枝の実家、坂手の岩井シンの家で暮らしていた。これが、一九三六年前半の貞枝母子の置

かれていた小豆島での状況である。「大根の葉」中、夫と別れて暮らしている「お母さん」が姑や義兄夫妻を掻き口説き、健を残して克子の手術のために神戸に長逗留できた背景には、このような和解があったようである。

「大根の葉」の「お父さん」側に立った言い方をすれば、「お父さんも」共産主義革命運動の治安維持法の犠牲者で、毛糸内職で二人の子供を細々養う「お母さん」母子もそのとばっちりを食った犠牲者家族なのである。その上、長女が重い視覚障害を持つて誕生したという何重もの不運を背負い込んでいたのである。その犠牲者母子が克子の人生を何とか切り開こうとして、手を取り合つての挑戦が「大根の葉」のテーマである。「お父さん」に頼れない「お母さん」はふた親の愛情と責任を我が身一つに背負い込むように力んで、健や「おばあさん」に協力を求めていったのである。

「大根の葉」の続編で、四つと六つになり遅く育つ克子兄妹を描いた「風車」からは、「お父さん」も娘の問題に真剣に取り組む家族として登場してくる。そして、当然、落合ソヴィエト（ナツプの本部事務所が有り、プロレタリア文学運動の中心地であった淀橋区落合地区の通称）の作家同盟関係者の中で、「大根の葉」の「お父さん」戎居仁平治がヤラレタ同志であることを知らない者は無かったと思われる。作家同盟の治安維持法犠牲者とその家族は一体となつて差し入れや生活の面倒を見あつていたからである。また、仁平治は一九三五年五月一〇日、宮本百合子が上落合の借家から淀橋署に検挙された直後の留守宅で撮られた記念写真にも壺井夫妻、窪川夫妻、中野重治夫妻、柳瀬正夢、松山文雄などの仲間と一緒に写っている。さらに栄のエッセイ「こかぼうの縁」や百合子の『十二年の手紙』、稲子の『夏のしおりー中野重治を送るー』（一九八三年三月）などを読めば、戎居一家が子供を含めて戦中戦後、稲子や百合子、中野一家と深いつながりを持っていたことがわかる。ちなみに発代の一九三九年五月から一九四〇年三月にかけての三度の手術で予想以上の効果をもたらしてくれた眼科医は、中野重治の東大新人会以来の同志近藤忠雄だった。彼は立花隆『日本共産党の研究 一』によると、一九二八年暮れから翌年にかけて共産党中央委員佐野学が委員長市川正一に国外から連絡を取る際のアドレスを提供した人物である。

栄が話す貞枝母子の小豆島便りを窪川稲子が「その話をそのまま書きなさいよ」と勧めたのは、一つには貞枝母子の境遇を転向時代の犠牲者家族が抱える典型的問題との奮戦を見たからではないだろうか。貧しくて一緒に暮らせない夫

婦のすれ違いや、転向時代の憂鬱からヤケになる夫、また、警察の拷問から病気になった夫を抱えて子供の食べ物まで儉約しなければならぬ極貧の犠牲者家族はたくさんいた。しかも、その犠牲者母子は特高警察や地元の巡査に監視され、「あっち（アカ）の孫さん」と周囲にも知られていたのである。栄や稲子自身、夫の転向後、特高警察がうるちよろするわ、夫との間がしつくりいかないうちの中、家庭の大黒柱として寝る間も惜しんで生計を立て子供を育てていたのである。「お母さん」のモデルの背後には同病相憐むの栄や稲子がいたとみるべきだろう。そして、知る人ぞ知る戎居妻子の頑張りの情報は転向時代の同志家族の心を励ますものと思われたのであろう。「大根の葉」の壺井栄は、新しい冒険の世界を追い求める向目的な健の生態を前面に押し出しながら、裏で重い障害を持った娘と治安維持法に痛めつけられて立ち上がれない夫を抱えた妻貞枝の忍耐や闘い振りを描きたかったのが本当のところだったのではないだろうか。しかし、「お母さん」をアカの妻とはつきり分かるように描くことは時節柄無理な話であつたであらうし、新米小説家の力量を越えたことでもあつたのだろう。そうだから、「大根の葉」は原稿用紙の端を三角形に折り返して「お父さん」を小説の舞台裏に隠した小説になつたのだろう。そして、第三子も克子と同じ遺伝性白内障の子供として授かつた戎居家族の涙と奮闘の歴史を、戦後に栄は「遠い空」（新聞『民報』一九四七年四月二二日〜七月一六日）で再び、隠してなく、「大根の葉」シリーズより何倍も具体的に踏み込んで、描くことになつたのだろう。マニアックな読者から見れば、「遠い空」は「大根の葉」シリーズの注釈・解説書の意味合いを多分に持つのである。

そして、共産主義革命運動を犠牲者家族救援係（モツプル）として戦つた壺井栄の小説家としての姿勢、読者への向き合い方は、主義者の家族、特に否応なく世間や親族に疎まれて日陰者の貧乏暮しを余儀なくされる妻子の辛酸に焦点を当てて描く。父ちゃんや兄ちゃんがアカだつたためにその家族全部が国賊扱いを受け、妻子の人権や生活権が剥奪されている被害者の状況を描く。その点が宮本百合子や窪川稲子とは大きく異なる点である。あくまで、二次的被害者も含めての鬱屈した家族愛を読者に伝えようとしている。これは習作「屍を越えて」から一貫して変わらない。それに対して、宮本や窪川は党员であり、共産主義の啓蒙雑誌『働く婦人』の編集責任者でもあつて、運動の前衛として大衆を率いる指導者的視点から読者に向き合つて作品を書いている。家族への不当弾圧を越えて家族一人一人が共産主義革命

に目覚めていく大衆家族の赤化、天皇制疑似家族国家を切り崩し、プロレタリアの勝利を占う小説を書くのである。

その比較の良い例が、非合法の共産主義青年同盟員で『働く婦人』の編集を手伝っていた詩人今野大力の同志家族を描いた宮本の『小祝の家』（『文芸』一九三三年一月）と栄の『廊下』（『文芸』一九四〇年二月）との違いである。もちろん、一九三三年と一九四〇年では検閲の厳しさが違っている点、また、モデルの今野の党の模範的闘士であった時期と死の病に侵されていた時期との違いも考慮しなければならない。モデルの今野は一九三〇年黒島伝治と手を携えて労芸を脱退、日本プロレタリア作家同盟に参加し、翌年戦旗社に加わった詩人である。一九三二年の日本文化連盟（コップ）の結成に参加。ソヴィエトから帰国して『働く婦人』の責任者になった百合子の編集協力者となる一方、非合法の共産主義青年同盟に参加して活動。一九三二年のコップ弾圧の際、警察の拷問を受けてひどい中耳炎になり施療病院で手術を受けたが、かえって病状を悪化させ、警察内で危篤状態に陥った。それで警察から釈放され息も絶え絶えにたどり着いたのが上落合の栄の家であった。そこから宮本百合子の計らいで栄が慶応病院に担ぎ込んだ。その後、聴覚を失ったが小康を得て非合法活動を続け、一九三三年共産党入党。栄養失調から肺結核になり、宮本百合子から二年ほど経済的援助を受けて療養したが、三五年六月に中野区江古田の施療所で死亡した。享年三一歳であった。戦旗社時代から壺井夫妻と懇意であり、『働く婦人』の編集協力者となつて以後は宮本夫妻とも深い縁を持った。妻久子が宮本顕治の地下活動のハウスキーパーを務めたからでもある。

百合子の『小祝の家』は自他ともに人道的文壇作家からプロレタリア作家への脱皮に成功した、と評価されている小説である。貧乏と革命との戦いに明け暮れ、入党して旭川から両親弟妹を上京させた頃の今野の家庭に取材している。妻をカフェの女給、弟を会社の給仕として働かせ、今野は地下にもぐっている。妹の療養費を東京でた一人の親類に借金すれば、ア力は放蕩者以下とののしられ、家族中がいびり倒される。世間一般の共産主義者理解を背景にモデル夫妻の素朴で誠実な家族愛が、父母をして「早く勉めようような世の中になんねば困る」と呟かせるようになる。さすがに「貧しき人々の群」以来二十年文壇で活躍してきた百合子の『小祝の家』は構成員、プロット展開、人物造形など、駆け出しの栄とは比べ物にならないほど彫りが深い。

それに対し、栄の「廊下」は今野の最晩年、爪に火をともしような自宅療養の末に施療院へ入院したが、死の苦しみを和らげる治療もされないまま逝った今野の無念と看取った妻の感慨と回想、また最期まで経済的援助してくれた共産主義者同志への夫婦の感謝が描かれている。そして、小説の上手下手は問わず、栄に描けて百合子に描けなかった点は、①、同志に甘え、他人の金で命をつながねばならなかった夫婦の心苦しさと自縛であろう。裏返せば、自立した闘士であり得ないことへの歯がゆさがある。家計に極度の儉約を強いて、妻が五歳の娘に下駄ひとつ新調してやれば諍いになるつましさ、律儀さである。夫は死を目前にして「覚悟して来たものの望まぬ方向に発展して、私は何と、お世話を今日までして下すった人に申訳すべきか、何という事が出来ない」と書き、妻は

人の助けを受けることのほか何も出来ない貫治が、たとえ一銭でもという気持は分り過ぎるほど分つてはいる。だが、シズエには又別にこんな暮しの中で育つ英子を可哀そうに思う気持ちがあった

とつぶやく。②、栄は主義者の夫を信じてついでいく妻や娘の犠牲を見逃してはいない。英子は英子で子供らしい欲望を隠し、「病気の父親への普段の心づかいから声を立ててはならないように慣らされている」のである。そんな中で、妻は病氣と貧乏と援助者への気兼ねの「苦闘に酬いられるのはいつの日であろうか」とため息をついてしまう。また、③、聲になり肺病を患った転向時代の夫の孤独も見逃していない。小さい時から貧乏人の気兼ねと卑下を身に染みて体験し、モツブル活動の中で家族さまざまの立場の人と直接触れ合った栄ならではの視点であろう。百合子の「小祝の家」よりはるかに複雑に屈折した家族愛が描かれているのである。まさに、モツブルの視点、戦いの後衛の視点で描かれている。そしてまた、戦いの後衛の視点とは、赤紙一枚で戦地に赴く大日本帝国兵士家族の家族愛とも位相を同じくする点がある。「戦争と革命の時代に生まれてきて／明日のわががばねは冷たくなるとも／止むに止まれぬ確信にもえて／たたかわんとする意志の力」（今野大力「たたかいの中に」）、と高らかに歌って革命のために命を惜しまぬ夫を抱える家族の思いは、「海の音」の出征家族の複雑な思いと同じである。与平の幼い息子三郎が「お父つあん、決死隊になったら、ツマコを忘れて闘うんかいの」、との痛烈な質問を父にするのと同じである。

前にも触れたが、「大根の葉」の原稿がひと通り出来上がったという一九三七年の春、転向時代の共産主義革命運動

家達の有りよう、またその家族が抱えていた問題をおさらいしておこう。宮本、窪川、栄などが属していたプロレタリア作家同盟（ナルプ）は解体し、その連合組織の日本プロレタリア文化連盟（コップ）の中でも、まだ抵抗を続けていたのは日本プロレタリア演劇同盟（プロット）くらいで、その背後の司令塔、非合法の共産党中央委員会は国家権力の弾圧ですでに壊滅していた。いわば共産主義革命運動は、総大将の首を取られ、白旗を上げて俘虜になる者、寝返る者、てんでばらばらに刀を振りかざしながらも敗走する者、陣の取り方や戦略を練り直す後衛の砦を見つけることさえ難しい状態に置かれていた。しかし、国家権力に思想と表現の自由、経済権さえも剥奪されたマルクス共産主義運動犠牲者家族、特に旧作家同盟家族の志を曲げかねている者は、いわゆる転向の時代以後も相互扶助的生活を続けていた。栄は保釈出獄しても就職できない夫との生活を支えるため、一九三四年七月下旬から宮本百合子の秘書兼家事手伝いとして働き、口述筆記をしたり、市ヶ谷刑務所に入獄中の宮本顕治への差し入れ用の毛糸のシャツなどを編んだりしていた。百合子も一九三四年一月から上落合の栄の家のすぐ近くに転居し、淀橋署に検挙拘留されたり、慶応病院に病氣入院したりの約二年の多難な時期を栄夫婦らに助けられて暮らした。窪川夫妻も目と鼻の先の戸塚に住み栄や百合子と三日に上げず顔を合わせていた。いわゆる落合ソヴィエトと呼ばれた地域で気の置けない仲間たちが、せめて自己放棄や戦時思想に安易に取り込まれまい、労働者大衆が主人公の歴史の道筋を照らすものであり続けたい、と抵抗を続けていたのである。彼らの相互扶助は決してパンだけの事ではなかった。いわば戦後の特攻隊の生き残りの恥と虚脱感を先取りしたような自暴自棄、ヤケな気分には埋没しないよう励まし合っていたのである。しかし、大衆離れと共産主義革命運動の組織崩壊から来る絶望感や閉塞感に飲み込まれない者は少なかった。

窪川稲子夫妻にも一つ屋根の下に二人の作家は並び立たないという、それまでのがむしやらの運動第一の生活の陰に埋没していた問題（職業作家としてのそれぞれの自由と同志夫婦の愛情の在り方の矛盾）が襲いかかっていた。いわゆる『くれない』事件である。転向時代、運動家としての外での英雄的活動を失った夫鶴次郎に、家庭は窮屈で気詰まりな古巣でしかなくなっていた。妻の仕事場と子育ての場であって、夫が自由にのさばって仕事のできる場所ではなかった。大衆の前衛として、運動が絆の二人三脚で突っ走って来た共産党員作家夫婦だったから足をすくわれたデカダンス

だった。夫が新しい愛人を得て転向時代のダメージを一気に払拭しようと、一人合点の仮想恋愛に走ったのだ。「いわば素朴な、恋人のような情熱を傾けていた」（『激流の魚』）共産主義革命幻想が瓦解した状況下、インテリゲンチヤの一つの傾向は、ロマンティックな革命の情熱を妻以外の女性との恋愛に振り向けて溺れ、目下の政治的敗北の問題から逃げようとしたことだった。典型的な例が一九三七年二月の、共産党員の演出家杉本良吉が妻を残して有名新劇女優岡田嘉子とサハリンからソヴィエトへ越境した事件だ。栄と繁治のカップルもその傾向の例外ではなかった。鷺只雄氏によって明らかにされた壺井繁治と中野鈴子（中野重治の妹で詩人）との不倫もその一例であろう。また、「大根の葉」の家族の「お父さん」のモデル戎居仁平治も、共産主義運動の敗残者で、子育てに追われる別居中の貧しい妻を女性問題で悩ましたのである。社会事情の激変によって、同志だった夫婦が旧同志にすぎなくなり、革命運動の組織と使命感が壊れると社会的視野を欠いた逃避に走る傾向を、稲子は「くれない」でこう書いている。

所謂「転向時代」の波はいろいろな、微妙な、それでいて空気のような執拗さで人々を浸し始めていた。広介と明子の場合にもそれは言えるのであった。灰色の現実には反抗しよう。自分の力を高めよう、とする彼らの意欲は、それとしては正しさを求めているながら、そのやり方は個人的に流れ、容易なものに妥協してゆきつつあるのだっただろう。明子はそれを自分で感ずることがありながら、ずるずるに押されてゆくのであった。生活の力は恐ろしい。時代の空気は眠っている間にも彼らに呼吸され、彼たちそのものが変色しつゝある。そしてそれを彼らは矯める氣力をさえ失いかけていた。

（「くれない」『婦人公論』一九三六年一月〜五月）

中野重治はそういつた転向時代の社会と運動家個人の関係を次のように歴史的に鋭くとらえている。

自分はついに真の革命家ではなかった。はがねのような労働者ではなかった。自分はインテリゲンチヤ分子として、社会の改革を夢みたことは本当だったけれども、最後まで実行上つらぬく力を持たなかった点、戦線全体を破壊にみちびいたものであった。中途半端分子をまじえることは却って戦線を脆くする。自分はつましく去るべきである。またこういういい方もあった。あるいはあり得た。自分はついに本当の革命的労働者ではなかった。賃金その他のために資本家階級とたたかおうとしたことは事実、だったけれども、社会革命の法則の理論的把握に欠け、

労働者階級の先遣分子として、他の諸階級層をみちびきつつ道を終局まで歩くことはできなかった。一人の労働者としてならばともかく、全革命陣列の主導的位置からは自分は去るべきである。こうして、それらがその通りだったとしても、脆い分子をさえ先頭分子として要求した日本の現実の歴史的要請は一と思いに抹殺され、撤退戦でのしんがりの、斬りまくり斬りまくりしながら一歩ずつ後退して行く全戦局的な意味が抹殺されて、…略…それが流行をなしていた時代であった。

（新潮文庫『くれない』解説一九五二年五月）

一方、百合子はそんな時代の空気に毅然と逆らって、一九三八年に当局から執筆禁止を言い渡されると、翻訳で暮らしを立てながら、マルクス、エンゲルス、レーニンの勉強に本腰を入れ、獄中の夫と『二年の手紙』で励まし合いながら、ともに高踏的インテリの非転向を貫いた。

しかしながら、転向時代、執筆禁止や戦時のナショナリズムの盛り上がりで読者を失いかけた作家たちは、何よりもまず、大衆が運動から離れていった原因を、国家権力の暴圧のせいとして片づけることなく、インテリ指導者の実践的政治力不足と大衆理解の未熟さとして、また、自由権も社会権も自ら獲得したことのない日本の近代社会の歴史的未成熟として、封建制を多分に温存させていた近代日本の政治・経済・文化的格差の現実として、とらえ直すべきであった。ファシズムに沸く大衆に対し姿勢を低くし謙虚に、大衆にとっての共産主義革命運動の必要性と、にもかかわらず受け入れられなかった現実とを子細に具体的に究明しなければ、プロレタリア作家としての主体を維持することはできなかった。稲子にしろ百合子にしろ、栄夫婦にしても、戦局の拡大する日中戦争下、国家権力や民衆から国賊の汚名を浴びせられながら、文学的抵抗の主体をどのような形で堅持し、あるいは立て直し、大衆の支持をどのように取り戻すか、その難しい課題に誠実に取り組まなければ時流に飲まれかねなかった。

それでは次に（２）の問題、栄のモッブル活動中心の共産主義革命運動と「大根の葉」シリーズの主題の関わりについて探っていこう。先天的視覚障害を持つ女兒の自立支援をする貧乏な一家の物語が、なぜ、日中戦争下のプロレタリア解放の文学になりえるのだろうか？

どんな場合にも家族の在り方は家族が帰属する国家や社会の規範性の影響下にある。家族は社会の鏡であると言ってもいい。一部の強者が支配する社会でパンくずの分け前にあずかるか、多くの弱い者が政治主体となつて手を組む社会に参加していくか？「私たちの運動の中には、家庭があり、子供があり、そして牢獄がある。オヤジが敵に奪はれても、その意志を継ぐものが女房であり、子供であつていいわけだし」（『だからこそ』）という信念を持っていた菜は、その逆も真、障害のある子供を抱える家庭生活の中にも共産主義運動がめざす平等社会の有りようへの努力があつてよいと考えた。そのリアルな良い例が、眼が不自由な娘の治療のために母親のリードで手をつなぎあう妹の家族だと考えたのだ。戦前の国体にも旧民法の家族秩序にも関係なく、最も弱い者に手熱い応援の手を差し延べ、自立させようとしている家族である。「親に目なし」とか「出来の悪い子ほど可愛い」という諺が愛される母権的日本の文化の伝統的心情に訴えながら、現実には、働く者が皆平等に報われる新しい母権的社会を目指す共産主義革命運動に賛同している家族、というシナリオなのである。「大根の葉」の「お母さん」は

母さんがいったわ。子供というものは五本の指とおんなじじゃ、どれが欠けても困るものじゃろ、小指が怪我をすりゃ小指に葉をつけてやらにやららんし、中指が怪我をしたら中指に繃帯せにやいかん。X子だけがかわゆうて、ほしいものを食べさすのじゃない。X子の病気がかわいそうだから、構うてやらんならんのじゃって。昔の人つてうまいこというわね

（「霧の街」）

と言つて、このような差別のない昔ながらの労働者家族こそ社会の縮図であつて欲しいと訴えているのである。そんなシナリオを秘めた小説のテーマが大衆読者に受け入れられるかどうかを問うたのが、「大根の葉」であつただろう。天皇家を祖先とする疑似血縁家族国家の幻想を戦争の道具として使ったファシズムとは反対に、生まれつき障害を持った最も弱い者の自立のために近代医学の手を借り社会の偏見を覆そうとする小さな家庭の実践的戦いを描いたのが、「大根の葉」とそのシリーズだつたのではないか。

それを宮本百合子は獄中の夫顕治に宛てて「壺井さんの『大根の葉』（文芸）好評で、稲子さんも私も鼻が高うございます」（一九三八年九月一二日付け書簡）と伝えている。続けて「大根の葉」の続編、「風車」と「赤いステッキ」が

発表され、「桃栗三年」（『新潮』一九三九年五月）「暦」（『新潮』一九四〇年二月）、「廊下」（『文芸』一九四〇年二月）も出て、それらがすぐ単行本『暦』（新潮社）に収まって、翌年には第四回新潮社文芸賞を受けたわけだから、世評は高かったのである。百合子も顕治に「栄文壇を席卷す」（一九四〇年一月二五日付け書簡）と書き送っている。

少なくとも、「多くの兵隊は家を持ち、妻を持ち、子を持ち、肉親を持ち、仕事を持っている」「生命が惜しい」、しかし、「なにかしら、この戦場に於て、それらのことごとくを、容易に棄てさせるものがある」「兵隊は人間の抱く凡庸な思想を乗り越えた。死をも乗り越えた」（「麦と兵隊」、と天皇制家族国家の共同幻想に訴えた火野葦兵とはまったく対極的な、「凡庸」でリアルな草の根民主主義の立場から、壺井栄が読者に迎えられたことはまちがいないだろう。

しかし、旧左翼の上田広など多数も含め文壇の大方が戦争協力の姿勢を示し、日本の経済的窮乏を国民一丸となつて満州の獲得戦争で解決を図ろうとしている時、がむしやに娘の視力障害の回復を優先させる母親とは、戸主を差し置いて、長男を踏みつけて、なんと自分勝手なわがまま者で、国家の一大事を知らない無知者だろうとの批判が一方で無くはなかっただろう。しかし、壺井栄の主張は、まず、ソ連、中国共産党と敵対関係になつてはならない。戦争自体が自国優先の差別なしには起こり得ない、と考えていただろう。次に、戦争による日本帝国経済のバイの拡大がすべての人間を潤すわけではないではない。バイが拡大しても、その分配に与れない働けない弱者や国家から差別される底辺の人間の問題は解決されない。種々の障害者や結核など回復不可能な病弱者、生産人口や兵役人口とみなされない子供や敬われない老人、また、男性と同等に扱われない女性、朝鮮人労働者などの民族差別もそうだ。おおよそ、思想、言論の自由が奪われ、国民全体が天皇の臣下として政治的主権を奪われていることが平等ではない。現に草の根民主主義の核である家族が戦争のために引き裂かれ殺されているではないか！さらに言えば、その天皇の名による戦争こそが次々に新しい差別を作り出していくのだと、秘やかに思っていたであろう。ドイツナチスが戦時の厄介者として二〇万人のさまざまな同胞障害者をガス室で殺し、精神障害者を断種したことは有名だが、日本でもそれに倣つて一九四〇年に「国民優生法」が成立した。臣民にふさわしい健全な素質を持つ者のみを「産めよう殖やせよ」という、強断種と中絶禁止を合わせた法律である。折から兵役に就けない障害者が「くくつぶし」と見下され、その家族が村八分にあい、

足手まといの障害児を持つ親は兵隊から子殺し用の青酸カリをわたされることもあったという。栄は戦後のエッセイ「成長しない子供たち―精神薄弱児の実態―」（『婦人公論』一九五四年二月）で特殊教育の草分け三木安正の次の言葉に深くうなづいている。

―近代のわが国の教育史をふりかえりますに特殊教育は平和と自由の時代に栄え、戦争と強権の時代には全く萎縮しました。このことは何を物語るのでしょうか。人間の尊重は教育の水準を高めるということは一つの公理としてもよいでしょう。

そして、日中戦争下の障害児への自立支援の視点は、「大根の葉」シリーズ、弱視の克子の勝気でたくましい成長ぶりと家族の応援の物語に留まらない。「櫓」（『知性』一九四〇年一〇月）も、小学校を二度も落第し小馬鹿扱いされながら「八年間皆勤」を通す「そのねばり」が体で仕事を覚える漁師にふさわしくはないかと、知的障害児の自立の道を探る家族愛を描いている。「ガンちゃん」（『祭着』一九四〇年一〇月）でも、知力も体力も人並みでない息子の取り柄（「個性」を「馬鹿正直」な「頑固」さに見出していく母親の温かさを描いている。一九三九年秋には、栄は、当時特異児童と呼ばれた山下清の展覧会を見て感動、『東京朝日新聞』（二月一三日）に「特殊児童の作品」を寄稿している。また、「寄るべなき人々」（『公論』一九四一年一月）では、第一次世界大戦後の不景気から都会生活の落伍者として孫を背負って帰島した老婆のキクが、村役場が「孤児院か養老院」の役割を果たしてもおかしくないとペラリと言いつけている。

そして「大根の葉」の母親が二人目の先天性白内障の男の子を出産して絶望し、「こういう子供は育たない方がいいのかしら？」と聞いた時、作家栄自身にあたる姉は、強く次のように答えている。

「そんなことは、ぜったいにないさ。」

と、大きな声でいいました。それから小さい声で、世の中は完全なものばかり、美しいものばかりではない。こういう子供に生まれない方が仕合わせにきまつているけれど、不具だから不幸に終るともきめられないし、まして不幸だから育たない方がいいとはなおいえまい。問題はその不幸をどう乗り切るかであると思う。無いものを無いな

いからといって悲しむよりも、有るものを生かすことだ、

〔窓〕一九四〇年八月

もちろん、この考えは姉から言われるまでもなく「大根の葉」の母親が克子を育てる時の信念でもあった。

……ともすれば不具者としてのひけ目から、納屋へ隠してでもおきたいようなあきらめと悲しみより知らない人たちに向って、千枝の心はだんだん鍛えられ、親としての深い愛情は、不具の克子を人目から避けさせることではなく、一人の人間として世の中に立たせねばならないという立前で、日夜その心は磨かれていった。

〔霧の街〕一九四一年九月

さらに、「風車」では、両親は克子の経済的自立や仕事の選択の自由についても思いを巡らせている。そして、駆け出し作家の叔母の栄は、実際に、発代の手術代だけでなく、同じ病気の発代の弟のためにも手術の費用を用立てたのである。手術をしても、〇・〇四と〇・〇五の視力しかない発代が尋常小学校六年になって「目が悪いからせめて音楽で身を立てよう」（戎居発代の日記）とピアノを習い始めた時、中古のピアノを手に入れ、それで生計が立てられるようになる環境を用意したのも叔母の栄であった。

現代から振り返れば、爆弾三勇士が国定教科書の国語や唱歌の教材として取り扱われた時代に、「大根の葉」、「風車」、「赤いステッキ」、「窓」、「霧の町」、「眼鏡」（一九四一年一月）と、戦時のやっかいもの扱いの障害児の人権擁護・自立支援の物語を書き継ぐこと自体、大変に勇気のある行為だったのではないだろうか。しかし、戦前の文壇において、壺井栄の文学の先験的主張、宮本百合子のトルストイ的ヒューマニズムをさらに推し進めた福祉的人間観、ノーマライゼーション的社会への希求といったものには全く気付かれていない。お涙頂戴のいささか古風な母子ものか、それにしても暗さのないのは「作者の長年の生活的鍛錬がそのまま立派な文学的結実を産んだ」^⑬めずらしい作風か、と受け止められていたようである。それゆえ社会的弱者ばかりを描く作風は「同じ題材ばかり手がけるとともに、この作家の狭さが感じられる」^⑭と批判もされている。作家持前の「功利感のない善意の美しさ」とか「現在の日本文学が根幹的に要求し、各々の作家が、それを回復することに失敗しつゝある人間性の素朴なまでの保存」^⑮の巧まない反映などという評価が精一杯のところである。障害者福祉法、児童福祉法、児童憲章も戦後になってからの制定であるから、栄の方が進み

すぎていたのだろう。戦後においても、栄の夫でマルキストの壺井繁治でさえ、「多くの小説がだんだん『国民服』を着せられたようなものになってゆく中で、そのような傾向に毒されぬ素朴な作品が、一人の無名作家によつて発表されたことが、批評家や多くの読者に文学への郷愁を感じさせたらしかった」（『激流の魚』）というにとどまっている。『暦』に収められた作品には障害者や病人、思想犯の家族が協力し、精一杯の日常を律儀に生き、また死んでいく様子が鮮やかに描かれている。「大根の葉」とその続編「風車」「赤いステッキ」には、四歳になって周りのいじめに打ち勝つて、盲学校への進学を夢見るまでになった克子と、それを支える母子家族が書かれている。「桃栗三年」は米が取れない小豆島で祖母と卒中の母親に主食の麦づくりをまかされた子供たちの夢が語られている。「暦」は、栄の実家岩井家三代をモデルに、貧乏に負けない向日的家風を描いている。商売の破産、義務教育制度のない時代に育った祖母や父の文盲、中風の母親、アカの亭主を持つ娘などを抱えながら、律儀に悔いのない人生を全うする家族を描いている。

では、最後に（3）、栄は文壇登場に際して、なぜ、故郷の小豆島坂手村近隣にこだわりの、その土地の言葉で文学の武器にしていたのだろうか。この問題を考える時、まず私の頭をよぎるのが繁治のこの言葉だ。

僕が原稿が思うように書けなくて、筆を投げ出そうとした時、徹夜してもかまわないから一緒に起きているとあなたに云われて、又ペンを取り直して書き続けたことがよくあったね。こうして、僕はあなたのゲキレイによつて、どんなに仕事をうまくやり遂げたかしれない。

（一九三二年八月二四日付け栄宛獄中書簡）

また、そのゲキレイの実態が、栄の「遠い空」の「昼でも夜でも」で、義兄（モデルは繁治）が請け負った少女小説の代筆を妻である姉がした、と書かれていることだ。つまり、『壺井繁治全集二巻』（一九八八年八月青磁社）に収められている「兄の同志に送る手紙」（『プロレタリア文学』一九三〇年七月）は少女小説ではないが、栄の代筆、または、口述筆記ではないかと疑われる点である。発表の時期は「シンパ事件」の拘束時期と重なっており、繁治がゆつくり小説を書く暇はなかったはずである。また、手紙文体の小説は栄のお得意であり、若い女性の手紙文体を繁治がこれほど巧みに栄のそれに似せて書けるとは思えないのである。さらに、一九三〇年頃までに書かれた繁治のアジプロ小説五編

の舞台はすべて小豆島であり、その中の二点は栄が材料を提供したと思われる。坂手村でのお上に楯突く共産主義者を出した家を官憲と村長がぐるになつて締め付ける話である。まさに明治近代日本が発元の際して五箇条の御誓文で撤廃をうたつた封建制度と、近代国家の官憲が結託している話である。それらの小説の中で、小豆島の東部方言は精彩を放っている。方言はある意味で封建制度の名残だが、中央集権的日本の近代化から取り残された僻村の農民やプロレタリアーが政治の主権者としての目覚めを語る言葉として小説の中で使われた時、その方言の意味は百八十度転換する。近代以前からの草の根民主主義の伝統を引いた言葉となる。

つまり、栄は子供が登場する習作を描く以前から、繁治の小説創作に深く関わり、合作とはいかないまでも、実質的な執筆協力者であつたのではないだろうか。香川県の伏石事件（一九二三年）以後の農民運動の高まりはあまりに有名だが、その香川の中でも米の取れない貧しい僻地小豆島の旧内海地区から天皇主権国家の政治経済構造に疑問を持ち、世直しに走る者が多く出るのも当然と言えば当然であろう。「五反百姓」とは一般的には貧しい農家を指す言葉だが、この地区では畑が五反もあれば裕福な部類の自作農あつた。「大根の葉」の、豚のえさ桶を担い棒でかついで段々畑の中腹まで登るきつい労働に耐える健のおばあさんは、傾いたとはいえ、グベンシャ（金持ち）で知られた旧家の未亡人なのである。「稼ぐに迫いつく貧乏なし」（唱歌「村の鍛冶屋」の一節）の格言のウソを知つた者が世直しをしなくてどうする！との思いが、繁治がマルキストになつた一九二八年頃から、夫婦共通の故郷に対する思いだつたのではないだろうか。繁治より一足先に文壇に出た農民作家でシベリア出兵、反戦作家の黒島伝治になると、「自分の身についても大切にする」頑固なまでの農民気質で、壺井夫妻以上に郷土の言葉や訛りにこだわつた（壺井繁治「方言・訛りなど」）。そして、久留島平治（日本無産青年同盟書記補）、久留島義忠（戦後、神戸医療生協組合理事長、治安維持法国家賠償要求同盟兵庫県支部長）兄弟など島の目覚めた者と連携して、井上ひさしの『吉里吉里人』（一九八一年）のような理想のふるさとする願いが、壺井夫妻の絆であつたのであろう。実際、久留島義忠の『オリーブの樹標——わが回想の瀬戸内海——』（一九八八年九月青磁社）を読むと、一九三三年頃には島の丸金醤油を中心に日本労働組合全国協議会の組織が出来、『労働者新聞』が読まれていたようである。

そして、満州国の建設以来押しつけた標準語の普及、日本語の統一といった国家プロジェクトに早い時期から全面的に抵抗してきたのがプロレタリア文学の伝統であった。小林多喜二の『蟹工船』、徳永直の『太陽のない街』の時期以前から尋常小学校を卒業しかねた労働者大衆の母語、方言や卑罵語、業界隠語、あけすけな卑猥語、また集団内の人間のつながり方を表す助詞・助動詞などを大切に写してきた。黒島伝治や繁治はもちろんのこと、栄にとつて方言とは、浄瑠璃語りは玄人はだしでありながら平仮名の読み書きがやつとだった父や、全くの文盲だった祖母のナマの声が響いてくる懐かしい家族の言葉であり、近代国家の恩恵を受けることが少なかった僻地の人たちの言葉だったのである。

しかし、「大根の葉」の健が尋常小学校に上がって習うことになる国定教科書の国語読本（サクラ読本）には日本民族の威信をかけた精神運動としての「国語の力」が載っている。

我が国は、神代このかた万世一系の天皇をいたゞき、世界にたぐひなき国体を成して、今日に進んできたのであるが、わが国語もまた、国初以来継続して現在に及んでいる。だから、我が国語には祖先以来の感情精神がとけこんでをり、さうして、それがまた今日の我々を結び附けてゐるのである。…一旦緩急ある時、国をあげて国難におもむくのも、皇国のよろこびに、国をあげて万歳を唱へるのも、一つには国語の力があづかつてゐるといはねばならない。

さらにそれに国語学者や教育関係者が拍車をかけ、NHKの学校放送を使って、発音、語法、言葉の区切り、イントネーション、アクセントまで、日本語を統一しようとしたのである。⁽¹⁸⁾ 沖縄県の方言撲滅運動の方言札はあまりにも有名である。香川県でも一九三八年に、「自国語に対する誇りを持ち得ぬものに何で愛国心がもち得ようぞ。今日、国民団結の強化が叫ばれ、国民精神の統一が強調せらるゝ秋、方言を醇化し、純正なる国語によって全国民を統一するは国語教育者の責務といはなければならない」との掛け声のもとに、方言矯正のための方言調査が師範学校関係者の手で組織的に行われ、脇田順一著の『讃岐方言の研究』としてまとめられている。

「壺井栄さんの方言の会話の出てくる作品の魅力に比較したとき、この作者の東京言葉で会話の交される作品の魅力

は劣る^①」と言ったのは窪川稲子だが、栄はプロレタリア文学の言葉の伝統に従っただけでなく、文盲の親たちや故郷の漁師、百姓がそれで立派に生活していた耳の地域言語を母語として積極的に小説に生かそうとしていたのである。「このひとは実にストーリー・テラーで、うまさは身についている」が、「もう一重掘り下げた心持を追う描写になるとだめです」（一九三九年一〇月二三日付け巢鴨拘置所、顕治宛書簡）、と実地的確なきびしい栄評を宮本百合子がしているが、作家としては読み書きの鍛錬の少ない栄の文学の長所短所を見据えた上での評であろう。無音の読み書きで自分自身と向き合い自分を掘り下げる作業を、伝達主体の音声言語中心の環境で二五歳まで過ごした栄が苦手するのは、仕方のないことである。しかし、それだから、栄の小説は読書に馴れない労働者大衆や子どもにも分かり易く、親しみ深い読みものであったと言えるよう。

栄は人生の困難を乗り越えようとする際、文字言語に習熟したインテリのように一旦退却し言葉で考え直し反省してから、また出直すという行動をとらない。心身全体で困難をバシッと受け留め耐えるだけ耐えて希望を失わないのである。不言実行、言い分けなしなのである。眼が見えないために些細なことでもしよっちゅう大喧嘩になる克子と健の日常を、「風車」の「おかあさん」は「兄弟喧嘩は餅よりうもつてなあ、ほんまに」、と二人の子供の矛盾する立場を同時に受け止めて笑うのである。健のモデルの戎居研造は「苦労を逆手にとつて幸せをひき出す開き直りはずるさかな^②」、と栄が口癖のように言っていたと伝えている。栄の文学の特色は、リアルな家族体験を担保に、平等な人間社会をめざすモラルとあふれる共生的人情を音楽性の高い方言で労働者大衆に届けるものだったと思われる。文壇的処女作「大根の葉」も栄の意思を尊重するならば、ダイコノハと読まれるべきものであらう。

注

(1) 井上寿一『日中戦争下の日本』Ⅲ章 戦場から国家を改造する（講談社選書メチエ 二〇〇七年七月）。

(2) 壺井栄「空」（『改造』一九五四年二月）。

- (3) 壺井栄「宮本百合子を偲ぶー思い出あれこれ」(『出版ダイジェスト』五七号、一九五一年二月)。
- (4) 壺井繁治・栄夫妻に実子は無い。早産してすぐに他界した栄のすぐ下の妹の娘・林真澄を、結婚した年の一九二五年十二月に満三歳で引き取り、実子同然に育てた。栄の日記によれば、一九五六年四月二七日に養子として入籍した。
- (5) 「刻々」は、一九三三年六月二三日執筆、没後『中央公論』一九五一年三月号に掲載された。宮本顕治はその附記で「この作品は一九三三年に書かれ、中央公論に送られたが、当時の特高警察の取調への状況等を大胆に暴露してゐるため、検閲の關係上到底発表不可能といふので雑誌掲載を見合はせられた」と記している。(新日本出版社版『宮本百合子全集』第四卷の解説による。)
- (6) 壺井栄「野育ちの青春」(『婦人公論』一九五五年一月)。
- (7) 『二人の手紙―壺井繁治・壺井栄獄中往復書簡集―』(二〇一六年六月 編集屋上)、壺井栄「合歡の花」(新聞「週刊家庭朝日」一三七号、一九五一年一〇月一四日) 参照。
- (8) 小田実「大きな小説―壺井栄『大根の葉』」(『文芸』一九七九年九月)
- (9) 「対談・佐多稲子・佐々木基一〈佐多・壺井文学の周辺〉」(中央公論社版『日本の文学』四九 佐多稲子・壺井栄『月報五二』一九六八年五月)。
- (10) 戎居仁平治「壺井栄年譜」(壺井繁治・戎居仁平治編 私家版『回想の壺井栄』一九七三年六月)、壺井繁治「子供と言葉」(『都新聞』一九三八年四月七日) 参照。
- (11) 村山知義『演劇的自叙伝 三』の「二十八歳、二十九歳」に「少年戦旗は…翌年(一九三一年)、私の妻壽子が編集することになったが、数カ月たつうちに、どうも芸術的で、プロレタリア的色彩が稀薄だという批判が出て、やむなく、編集長の座をおりた」とある。
- (12) 戎居仁平治の家督相続については、壺井繁治の甥壺井増十郎氏夫人壺井初子氏に御教示いただいた。
- (13) 壺井栄「木屋のある家」(『群像』一九六〇年十二月)、宮本百合子「一九三二年の春」。
- (14) 鷺只雄「隠された真実―壺井栄における作家転身の意味―」(東京教育大学国語国文学会『言語と文芸』一〇号 一九九四年二月)。
- (15) 平野謙「文芸月評―『新潮』『日本評論』―」(『現代文学』一九四〇年四月)。
- (16) 大谷藤子「女性作家論 二」(『河北新報』一九三九年十二月一三日)。

- (17) 矢崎弾「新刊読書評論―壺井栄著『暦』について」(『日本学芸新聞』一九四〇年三月二五日)。
- (18) 水原明人『江戸語・東京語・標準語』第四章(講談社現代新書 一九九四年八月)。
- (19) 佐多稲子「壺井栄論」(講談社版『佐多稲子全集』一七卷 一九九七年二月)。
- (20) 戒居研造「父のこと 栄のことそして繁治のこと」(戒居仁平治『壺井栄伝』一九九五年一月)。